

## 5 古民家再生プロジェクトとワークショップ活動 (2013年度／長野県須坂市)

井上 遙子

建築デザイン研究室

佐藤 百合子

染織研究室

高橋 正樹

インテリアデザイン研究室

渡邊 裕子

建築デザイン研究室

北岡 竜行

絵画研究室

牧野 昇

造形文化研究室

伊藤 丙雄

東京工科大学

2013年度は古民家を拠点として、地域とのコミュニケーションを広げるために、近隣の小学生を対象に立体凧づくりのワークショップを開催した。

須坂市および地元の協力を得た結果、近隣の児童40名と保護者が参加することになった。企画・運営側は本学担当教員6名、東京工科大学教員1名、学生16名（文化学園大学および東京工科大学）が主として行い、市役所職員や地域の住民の協力を得た。

### ワークショップ概要

ワークショップの目的は地元でも珍しくなった伝統的な古民家を舞台に、将来を担う子供たちの創造性を刺激し、ものづくりを通して「地方-都会」、「官-民」、「子供-大人」の交流を活性化させることである。

具体的には北岡のアイデアを基に、立体凧の制作および凧の胴体である和紙への描画を中心に行うことに決定した。

須坂には8/7(水)～10(土)の4日間滞在し、初日と翌日は準備、9日にワークショップを実施した。

### 凧について

計画では凧作りの制作に3時間程度の時間を予定していたので、子供たちでも特殊な道具を使用せずに簡単に作れることを勘案し、行燈型の立体凧を制作することにした。フレームおよびボディには木材と和紙を使用し、輪ゴムや両面テープで短時間に制作できるようにした。

### ワークショップ

まず、凧の胴体に貼る和紙を用意し子供たちに絵を描いてもらった。描画に差がでないように抽象画を手法であるドロッピング、スパッタリング、ボカシ・にじみ、大きなヘラを使った描画などさまざまな方法で子供たちに自由に絵を描いてもらった。また、大きな和紙を古民家の庭一面に敷き詰め身体全体で描けるように工夫した。最初とまどっていた子供たちも次第に要領がわかってくると、自由かつ大胆に絵を描くこ

とを楽しんでいる様子だった。

絵が完成したあと、フレームである木材の角棒を組み立て、凧糸を取り付けることで強度アップをはかった。その後、彩色した和紙凧のフレームへの貼り付けを行った。

午後は完成した凧を手に、古民家から車で30分ほどの峰ノ原高原に移動、さわやかな夏の高原の空気がいっぱいの広場で手作り凧の処女飛行を行った。

さらにサンプルを含め完成した51個の凧を合体し、幅3mを超える巨大凧を制作と凧上げにチャレンジした。



### まとめ

今回のワークショップを通じ、大学（教員・学生）、官公庁、地域が三位一体となり、それぞれの視点を認識・共有できたことは貴重な体験となった。

地域の子供たちと学生とのモノづくりを通じた交流が、双方の今後の活動へのヒントとなれば幸いである。

また、翌年の春（3月）にも再度須坂を訪れ、やはり地域の方々から伝統的な「そば作り」、「みその仕込み」等を伝授いただいた。

普段とは異なる環境、人々との協同を通じ懐の深い教育活動を今後も継続していきたい。

